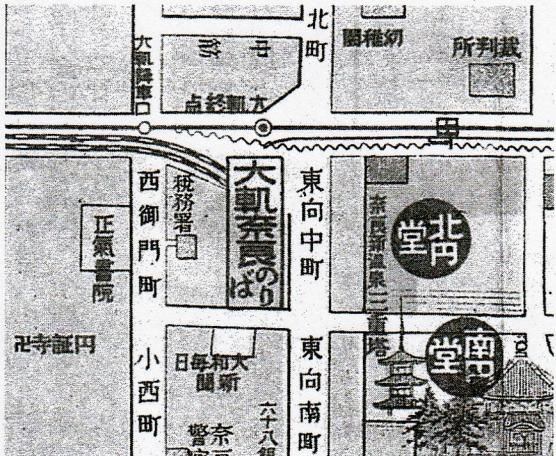


# やまと 民俗への招待

東大寺に関わる茶粥<sup>アサヒ</sup>  
起源説を二つ前回紹介  
した。ともにちまたの  
説であるが、江戸時代  
元禄期に、茶粥の発案  
者のこと記した文献  
がある。河内国石川郡  
大ヶ塚（現大阪府河南  
内郡河南町）の河内屋<sup>カニヤ</sup>  
五兵衛<sup>可正</sup>（163  
6~1713）が記し  
た『河内屋可正日記』  
がそれだ。

南都二弥二ト云者、貧キ者ニテ仕始メタリ」と聞いたという。それで昔は茶粥を食べることを「弥二ラタカン」「弥次ヲ用ン」と呼んでいたが、今では「茶ヲタク」「茶ヲノマン」と言うようになったといふ。仮に可正が20歳ごとに、老人が50年ほど昔のことを話したとすると、弥二が茶粥を始めたのは江戸時代初めごろとなる。



1935(昭和10)年の奈良名勝案内図(部分)。小西通りの西側は正氣書院あたりから小西町

僕約のためで、賣家には捨てがたいものだったとも記している。元禄期には河内まで普及していた「やじ」は、「やじふ」「弥十」とも呼ばれ、地元奈良でも茶粥を始めた人物の名が伝えられていた。

記に「茶粥ヲやじうトイヘルハ、寛永年中二、小西町井戸屋弥十郎トイフモノ、初メテ仕出シ侍ル。弥十郎ヲ略シテ弥十トイフナ

茶粥は僕家の奈良町民の発案で、現在の近鉄奈良駅のすぐ南西の小西町から始まったことになる。これが「奈良茶粥発祥の地」と知られる人もなく、商店街は

「」とし、さらに上野から聞いた話では、弥十郎はもと酒屋でその敷地跡が正氣書院だという。正氣書院は宣昭の義父越智宣哲が創立した学校で、場所は現在の小西通りの商店街の西側だった。

僕約で発案した茶粥

(鹿谷勲・代表・研究所)